

住井すゑとその文学の里(十八)

―牛久沼のほとり―

牛久市文化財保護審議委員

栗原 功

住井すゑの小説『大地にひらく』

―昭和初期の主な文学作品―

昭和初期における主な文学作品は、まず昭和3年(1929年)の住井より1歳若い林芙美子(昭和2年1月から昭和5年5月まで阿佐ヶ谷在住)が文人芸術に『放浪記』の連載を始めた。

翌4年に島崎藤村が中央公論に明治維新に奔走した父親の生涯を歴史的にとらえた大作『夜明け前』の連載を始めた。この年には犬田家のすぐ近所に住む小林多喜二がナツプ(全日本無産者芸術連盟)機関誌『戦旗』に中編小説『蟹工船』を発表して、優れたプロレタリア作家として評価された。

同5年は阿佐ヶ谷に住む横光利一が心理主義作品『機械』を発表し、同8年には一時(昭和2年5月から12月までの7カ月間)阿佐ヶ谷の一角に住んでいた川端康成が『禽獣』を発表した。

ところで昭和3年の1月30日に読売新聞が創立55周年記念の懸賞小説を公募した。公募の要項は、物語の梗概と初めの30回分だけを6月末日までに提出することであった。住井はこれに応募しようと決心した。生活費のための童話書きと家事に追われていて長編

を一気に書き下ろすのはとても無理であったが、30回分だけなら3月ごろから書き始めればなんとかなるだろうと思ひ、家事の合間に粗筋だけを頭に描いていた。小説は『大地にひらく』と題し、作品の主たる場を住井の出身地奈良の農村に設定、「地主が農地を全て小作人に解放し、理想的な新しき形態の農村を建設する」というストーリーであった。「農地解放」は夫卯の思想と共通し、長塚節(結城郡国生村・現常総市出身)の小説『土』の影響も受けていたようだ。

選者の武者小路実篤は「しまひが少し活動的になりすぎてゐた」と評していたが、主人公精一が、物語の最初で都会生活を捨て農村に理想社会を建設しようとするところは、自分の理想実現へ向けた実践「新しき村(大正11年に宮崎県児湯郡木城村に開いた)建設と重なる共感を持ったのであろうか。結局、『大地にひらく』は2等に入選して住井は1千円の賞金を獲得した。1千円は大変な金額だった。この年の国家施行予算が17億5931万8千46円、当時の女性の事務員の月給が20円から50円だった。

野口(雨情)家と犬田家の交際

一方、田端文士芸術村で野口雨情一家と犬田家の交際が始まっていたが、その交際は犬田家が杉並町に移ってからも続いていた。

昭和6年の2月に犬田家では二男の充が生まれた。この年の夏、雨情が北多摩郡武蔵野町(市)吉祥寺の自宅から小瓶を抱え中央線に乗って度々犬田家を訪ねた。雨情は生まれたばかりの三男の在彌に与えるため住井の母乳を分けてもらいに来ていたのだ。住井も二男充を背負い、長女かほるを連れて何度か雨情宅に行き、雨情の三男在彌に乳をあげていた。―かほるの記憶によれば、雨情はかなりの豪邸に住んでいたという。

雨情は、自ら刊行の創作民謡集枯草、第一童謡集『十五夜お月さん』、民謡集別後、童謡集『青い目の人形』、それに編集を担当していた『金の船』のち『金の星』に、童謡、民謡、流行

歌を発表していた。その主な作品名には、『十五夜お月さん』『船頭小唄』『七つの子』『赤い靴』『青い眼の人形』『赤とんぼ』『黄金虫』、生後間もなく亡くなったわが子への鎮魂歌といわれる『シャボン玉』『証城寺の狸囃子』『雨降りお月さん』『俵はごろごろ』『磯原節』『波浮の港』『上州小唄』『大阪城小唄』『春の唄』『かもめ』などがある。

他方で雨情は、茨城県土浦市立土浦小学校、兵庫県立姫路工業高等学校、和歌山県高野町立立応其小学校、長崎県佐世保市立大野小学校、東京都武蔵野市立第一小学校など28校の校歌も作詩している。

雨情はその63年の生涯の中で、2000余点にのぼる詩を残している。武蔵野市の井の頭池畔に昭和27年(1952年)に雨情会(初代会長中山晋平)のメンバーによって碑が建てられ、その碑には雨情作詩『井の頭音頭』の一節が刻まれている。



生命の尊さと平等を熱く語り続けた信念の人―70年に及ぶ創作活動のなかから、その魅力のすべてを収める決定版！
【長編小説1】
相尅 大地にひらく
19歳の処女長編『相尅』と、未刊行の読売新聞懸賞当選小説『大地にひらく』を初収録―住井文学の出发点2編。
住井すゑ作品集 第1巻 定価：本体3800円(税別) 新潮社

『大地にひらく』―この小説が住井すゑの出世作になった。